

自分の発見

絵本で感じる親鸞聖人の教え

四衢 亮

目
次

表紙デザイン
廉岡耕

■ 絵本を通して親鸞聖人の言葉にふれる.....	1
■ 子どもの成長が問いかけるもの.....	3
■ レオ・レオニという人.....	9
■ 自分のなかに「ベツエッティーン」がいる.....	13
■ 今、自分がここにあることになんぞぎたい.....	16
■ 何かにいつも追い立てられている.....	18
■ 強きものは弱きを伏する.....	22
■ 人間を深みに陥らせるもの.....	25
■ 格差をつくりたがる人間の姿.....	29
■ 降り注ぐ情報のなかで本当のことがわからない.....	32
■ 探し求めていたものは.....	37

■ 「自分にうなづく」ということ.....	42
■ 今ここにある自分をいただく.....	44
■ 法然上人がはなった光とは.....	48
■ 愚者になりて往生す.....	55
■ あとがき.....	67

むなしさを感じるのは、
本当に自分にうなずきたいということがあるから

■ 絵本を通して親鸞聖人の言葉にふれる

今日は何か講題をといたことでしたので、「愚者ぐしやになりて往生おうじようす」という言葉を出させていただきました。これはご承知のように、親鸞聖人しんらんしょうじんが「文応元年十一月十三日 善信ぜんしん八十八歳」という日付と署名を入れて書いていらつしゃいますお手紙の中のお言葉です。

親鸞聖人は九十歳でお亡くなりですから、八十八歳というのは、もう最晩年ということになりますし、教えに関する内容が含まれているお手紙としては、おそらくこれがいちばん最後の手紙だろうと推測されます。

そのお手紙の言葉を、現代を生きる私たちがどうかたちでいただいていくのかということを考えてみたいと思います。それで、その言葉

をいただきながらご一緒に考えていただく題材といたしまして、一冊の絵本を持ってまいりました。

絵本というのは、原則として、大人が子どもに読み聞かせるものです。そして子どもたちは、絵本の絵と、耳から入ってくる声とを融合させ、絵本という空間のなかでいろんな冒険をし、わくわくしながら物語のなかに自分も入って楽しんだり、自由闊達かつたに動き回りながら、子どもたちの上で絵本というものが完成されていく。そういうかたちで絵本というものがあります。

現在、ブックスタートという運動が各地でおこなわれています。ブックスタートというのは、イギリスのバーミンガムという町で始まったのですけれども、日本でも赤ちゃんが生まれて一歳半検診などの機会に、

保育士さんとか保健師さんが一緒に選んだ本を赤ちゃんに二冊プレゼントするというものがありますね。赤ちゃん向けの絵本で、お母さんやお父さんに、赤ちゃんと一緒に絵本を読んでもくださいというかたちでお渡しするのです。

■ 子どもの成長が問いかけるもの

初めて絵本を読んでもらうとき、子どもたちは、絵本をとおして自分に優しく声をかけてくれる、そしてほほ笑みかけてくれる、そういう存在を感じることをとおして、安心感と安定感を開いていきます。

それから同時に、絵本をとおして子どもたちと向き合うという提案をしてくれた保健師さんや保育士さんが、お父さんお母さんと顔見知り

なり、育児のなかでいろんなことに悩んだり、あるいは疑問を持った時などの相談相手になるきっかけにもなっていくということ、ブックス・タート運動というのが行政においても進められています。

人間というのは、生まれたときに自分に優しく声をかけて、ほほ笑みかけて、そして愛情を注いでくださる、そういう方との出会いのなかで育っていくわけです。何もしなくても人間は人間になるわけではなくて、なかなか手間がかかるわけです。

そういうことをあらためて私たちに問題提起し、考えさせた事件は、これも有名なお話ですからご存じだと思いますけれども、一九二〇年にインドの西ベンガル州というところで、オオカミに育てられたという少女が二人発見され、保護された事件です。

これはなぜそういうことになったのかよくわからないのですけれども、アマラとカマラと名付けられた二人の姉妹は、オオカミに育てられたのです。姉妹かどうかということも、はっきりしていなかったのですけれども、とにかく小さいほうのお子さんは、保護されてすぐに亡くなってしまういます。

それで上のアマラという子が生き残ったわけですが、保護されたときには、まったくオオカミそのものです。明るいとこを嫌いますし、暗いところを好み、ニワトリを見たら捕まえて生のまま食べてしまう。そして、怒りと空腹だけを感情として表す。まさにオオカミそのものだったわけですね。

そのアマラを保護したのは牧師さんです。当時インドはイギリス統治

下ですから、イギリスから来ておられた牧師さん夫妻が保護し、養育していくのです。すると、ずっと四本足で走っていたアマラが、二本足で立って歩くようになるまで三年かかります。生肉を食べなくなつて、調理したものを食べるようになるのに七年かかります。その七年目ぐらいに、ようやく初めて牧師の妻を「マ」とだけ発音して呼ぶようになった。それにやはり、七年ぐらいかかっているのです。

だからそこでわかるのは、人間というのは、適切な時期に適切な教育と愛情が注がれるということがないと、人としての成長を取り戻すのにたいへんな時間とエネルギーが要る。そういうことがアマラの姿をとおしてわかるわけです。

その後、アマラは病気で亡くなつてしまいますけれども、二足歩行が

できて、調理したものを食べるようになり、牧師の妻に「マ」と呼びかけるということまではできたのですが、最後までできなかったのは「笑う」ということでした。

私たちは、笑うことなんて何でもなくすぐできると思っています。べつに教わつたわけでもないですね。「笑うというのは、こうするんですよ」と教わつたりしたことはないですけれども、笑うことができます。それは小さいころから、周りの人にほほ笑みかけられ、語りかけられるという愛情のなかで育つたからです。

赤ちゃんは、何もできない存在として生まれるわけですが、その赤ちゃんのいのちそのものが、周りを明るくするのです。なぜなら、自分の全身を人に預けるといふことほど深い愛情、信頼はないのですから。そ